

郷愁の旅路

——日本と「西洋」を往還する
文学的巡礼

稲賀繁美

鶴田欣也さんに捧げる学会がヴァンクワ
アーで催されると、初めて耳にしたのは、南
太平洋、ポリネシアはタヒチ本島パペーテに
おいてであった。八月末に国際比較文学学会の
理事会が、同地のフランス領ポリネシア大学
で開催されたが、そこに出席されていた菅原
克也さんからのお知らせだった。帰国するや、
組織責任者の Susan Fisher さんに連絡を取
り、急遽参加させて戴くことにした。題して
Nostalgic Journeys: Literary Pilgrimages
between Japan and "The West" (一九九
九年九月十八—十九日。British Columbia
大学の The Department of Asian Studies
および The Center for Japanese Research
の後援)。

記録的な猛暑の続く日本を後にして関西空
港を夕刻に飛び立つと、ほどなく飛行機左側
の窓からは、夕闇の雲海のうえに、富士山の
山頂が小さな円錐となつて望まれる。太平洋
上空から一目で見下ろせる日本列島は、いか
にも小さい。短い夜を経た翌朝には、一転し
て眼下には広大なカナディアン・ロッキーが
どこまでも続いている。狭い日本を捨てて、
カナダに終の棲家を定めたケン・ツルタの心
意気にしばし思いをはせる。峨々たる山塊の
麓は一面に白い平面に覆われ、流水かとみま
がうが、機体が高度を落とすにつれ、それは
低空を包む海洋性の霧の綿菓子と判明する。
ほどなく機体は、ヴァンクワアーに降り立
つ。大学構内の新渡戸記念公園の落葉樹が、
葉の先端をわずかに紅葉させ、美しい初秋の
到来を告げていた。

学会前日の十七日夕刻には、日本総領事館
でレセプション。鶴田さんは体調が許せばご
出席と予告されていたが、参加者が歓談して
いる人垣のなかに、例のひょっこり、といっ
たカジュアルな雰囲気姿を現した。体こそ

すっかりお痩せになっていたが、酸素ボンベ
を乗せたキャリアーを引いての正装ぶりは、
いかにもサマになっていて、照れ臭そうな笑
顔は昨年コペンハーゲンでお別れた折の鶴
田さんと変わらない。はるかに悪い病状を危
惧していた当方としては、息は切らせなが
らもご自分の足ですたすたと歩いてこられる鶴
田さんを見て、正直ほっとした。傍らには智
栄子夫人の姿があつて、鶴田さんはこれが最
初と思つたのか、わざわざ当方にも紹介され
ようとする。一昨年、京都の日文研でお会
いしましたよね、と切り返すと、ちよつぱり当
惑した様子で、怪訝そうに「そうやったかい
な」と(関西在住中に仕込んだ関西弁で)首
を捻つて見せるあたりも、いつもと変わらな
い。腰を降ろされたソファの回りには、旧
友や元学生たちが次々に集つて、こぞつて話
をしようとする。老齡の孤独とは無縁のその
有様を見て、幸福な名誉教授の晴れ舞台、と
思わずにはいられない。今日あることを感謝
する鶴田さんの手紙を代読した、かつての同
僚 Kenneth Richard さんは、感極まつて
思わず声を詰まらせていたけれど、傍らの鶴
田教授は、座ったまま、落ち着き払つて、そ
れに一言三言付け足す。そこには、豪気とい

つてよい風格に加えて、病との対話のなかから得た、一種の安心立命のような境地すら窺えて、羨ましくもすがすがしい。

翌朝から、会議が始まる。会場は C.K. Choi Building。窓の採光を大きくとった快適な建物で、骨太な廃材を再利用した梁の工夫などにも、森の国ブリティッシュ・コロンビアならではの風情が見える。授業の都合で参加が叶わなかった神教子氏から贈られた、心づくしの花束が飾られている。会場の正面には、Joshua Mostow さんの尽力にも感謝せねばならない。冒頭の keynote address は平川祐弘教授。日本回帰を拒んだ越境者としての鶴田欣也を、日本の近代知性史のなかに位置付ける系譜学。『波』七月号で佐伯彰一氏が、北米にもっとも馴染んだ日本出身の日本文学研究者の三人に数えたケン・ツルタは、おそらくそこに含まれているはずのマサオ・ミヨシほどには ill-natured ではなかった、などといったきわどい発言に、会場はしばし笑いに包まれる。だがこのカナダに回帰した越境者は、実は生母を早くに失い、西洋に憧れ、日本からの脱出を夢見る変身願望の青年だった。そこにはツルタが、同様の幼少を経験した芥川龍之介や川端康成の心理の變

を余人の追隨を許さぬ鋭利さで解剖した秘密が探られるし、張競氏が『毎日新聞』（七月四日）の「越境者が読んだ近代日本文学」への書評で、これは著者の変装した「私小説だ」と喝破した指摘の適切さも悟られる。さらに、最近自ら人生に決着をつけた江藤淳もまた継母に育てられた幼児体験をもてばこそ、漱石の「我輩は猫である」の冒頭の「名前はまだない」に捨て子の心理を読み解く鋭さを発揮しえた。この江頭淳夫との比較は、鶴田家に招かれた際に平川氏が披露したもののだが、これには鶴田さんも驚いて、「なんだ、オレといっしょじゃねえか」などと呟いていた。（『文藝春秋』一九九九年十一月号参照）

港を望む絶景が窓から眼下に広がる鶴田家での深夜の談笑は、話題汲めども尽きず。とりわけ平川先生とツルタさんとの掛け合いは絶品で、互いに揚げ足を取りあつて揶揄しながらも、そこには長年にわたる知的共働作業のうえに築かれた深い相互信頼の様がおのずと浮かびあがる。肝胆あい照らすとはこのことかと讃嘆しつつ、さながら一幅の話藝と評すべきその趣をすっかり堪能させて戴いた（密度が濃すぎて、その細部はかえって記憶

に止めていないのが残念だが、一服の清談は消え行くに任せるのがふさわしい嗜み、とも感じられる）。今度はそろそろ墓の彼方への越境準備というわけで、仏様の頭につける被り物自作したところ、第一号は K.K. の三角帽みたいになってしまったので、また新品を設えたど、あいかわらずの変身願望を得意げに披露するご主人は、智栄子夫人にからかわれたり、大嶋仁夫妻と舌戦を繰り広げたりしながら、来客と弟子筋のうわさを交えて余念なく興じている。自然態のもてなし。寛ぎのなかに闊達さを楽しんでいる風情だ。何よりの御馳走は、昼間の学会で読まれたベイバー。これをダシにした品定めの様を思い起こしつつ、以下略記する。

二

第一部は、西洋知識と日本文学。最古参の弟子のひとり Roy Starrs の三島論は、由紀夫の他国憧憬を希臘と印度とに分け、奥野建男が風呂屋のペンキ絵と酷評した神島版ダフニスとクロエたる『潮騒』の太陽への讃歌から、物質の腐敗と精神のニヒリズムを招くインドの苛酷な太陽への振幅のなかで、完璧

なギリシア的肉体の仏教的生まれ替わりに賭けた三島の自刃を、カーリー女神が要求する供犠に重ね合わせる。いささか図式的ながら教育的配慮ある逸品。Maria Jesus de Pradera Vicente は、日本美学の具現と見られる川端康成の新感覚主義以降の展開を、西洋新思潮と東洋美との合金あるいは合わせ鏡として跡づける。康成は美に殉じた虚言癖の倒錯者であり、「美しい日本の私」はあくまで作家が思い描いた架空の日本と訳すべきで、「美しい日本と私」としたサンデンスティックの英訳は misleading だという。長々しいマラルメ梗概より、むしろ「哀愁」「山茶花」「下町の話」「ある作家の生涯」さらに川端の『聖書』、「いのちの木」といった作品を一層具体的に掘り下げて欲しかった。

続く第二部は英国作家と日本。John de Gruchy の『Walcy と能』は、アストンやプリנקレイにはじまる初期の能作品の英訳者たちが、能を民衆劇かそれとも貴族階級の娯楽と把握したかの振幅に焦点を合わせて、ウェイリーとバウンド、イエイツの差異を際立たせる。受容史に該博な知識をもつ論者だけに、雅俗という角度に限定し、またフェノロサらの試みを単に紛い物扱いしたのがかえ

って貧血症で、さらに多角的な問題意識で切り込んだほうがおもしろそうだ。これには『西洋の夢幻能』を最近上梓した成恵卿氏から適切な補足があった。大嶋仁はカズオ・イシグロの描く主人公たちが一貫して、価値観の変化のなかで過去の記憶との葛藤を演じることを指摘する。一見日本とは無縁の戦後英国を舞台とした『日の残り』に描かれた、時代遅れの老執事が固執する「威厳」なるものが、主人への服従、我の抑圧、価値判断の宙ぶりなどにおいて、実は今や失われた戦前の日本人の価値観にも密かに——おそらくは作者自身無意識な底流で——通ずる面を宿していることを説得的に論証した。イシグロその人に做ったかとも思われる明快達意の英文と、思い切った断定口調、水際立った質疑応答ぶりに舌を巻く。今回最高の発表のひとつ、という大かたの見立てに同意したい。

Susan Fisher は Angela Carter の日本滞在（一九六九—七二年）に焦点を当て、ストーリーテラーとしての才能と謙虚な人柄とで好感を与えたが、話題がやや流れ、末尾はちと長すぎ。文楽の人形が人形師を殺害する話や、賓客の自分が宴会の御馳走だと気づくプロット（宮沢賢治の「注文の多い料理店」

ばりだ）。こうした支配と被支配との主客転倒には、ボーやホフマンを引き継ぐファンタジーと、お定まりのオリエンタル・エクソティスム（盆栽は拷問、入れ墨は嗜虐、などなど）による香りづけを越え、服従による勝利といったサドの教義にも通ずる教訓が汲み取られる。さらに自分こそが「女のピンカートン」であり「御馳走」の位置にあることを悟った彼女の日本体験は、「他者性体験の試金石」となり、ここから男性模倣とは別個なフェミニズムへの目覚めに至る回路が探られる。

続く第三部は「国家とアイデンティティ」。Janice Brown が林芙美子と大庭みな子を中心に、放浪、浮浪、そして女性亡命の文学タイポロジーの可能性を示し、Susan Napia (Robert Kahn による代読) が大江健三郎の『飼育』における他者体験から「燃え上がる Green Tree」の故郷における治癒者ギールの形象への遍歴を要約。何時もながら、ノーベル文学賞作家のご威光に擦り寄った無批判なご追従は、優等生ぶり丸だしでいささか陳腐。

三

よい「理論派」大演説の陰で、ずいぶんと損もする様子。

二目目の白眉は、冒頭を飾った Hasegawa Hirata の小林秀雄論。「故郷を失った文学」(一九三三年)を犀利に腑分けして、もはや不在でしかない「故郷」に近代の悲哀としての歴史意識を探る。「故郷」が「故」すなわち亡失、死に通じる時間意識と、「郷」すなわち home village という空間を暗示する語彙との複合から成立している、といった分析から始めて、プルースト、ベルクソン、ベンヤミンを引き寄せつつ小林の沈黙の核に迫る。伝統を破壊する歴史のなかで、個人は伝統を発見すべく成熟する。『成熟と喪失』の弁証は、「日本精神」や「東洋精神」を拒絶する。ガラス細工の城を思わせる、鋭利だが傷つきやすいヒラタの分析。その詳細は、刊行予定の論文集をご覧戴くほかない。教室での授業ぶりも彷彿とさせる技巧派の微細読解は、師匠・鶴田からの伝授という以上に、もはやヒラタのお家藝の域。ただし演者の「文学への愛」を納得させるこの繊細な藝、比較少数の熱心な聴講者には功を奏するものの、北米お得意の巨大会大広間では、威勢

この第四部「アジア再発見」では、ついで

成恵卿と稲賀が岡倉天心論を闘わせた。質疑応答の Sharalyn Orbaugh のコメントに触発されて、こんな夢想到導かれた。天心が仮設した「ひとつのアジア」理念は、いわば父殺し同然に、弟子世代の淹精一、大村西崖、伊東忠太から忌避された。この晩年・没後の挫折ゆえに、天心はいわば「見えざる媒介者」(ジジェク)と化し、それが小林秀雄の世代に「外傷後ストレス症候」として不在の故郷の悲哀を植え付けるに至ったのではないかと。むろん、この故郷喪失の分水嶺は日露戦争であり、『茶の本』は政治からの疎外と隠遁の表明であり、伊藤博文の暗殺が岡倉の時代の終焉とも呼応する。そして「我らはひとつ」と書かれた草稿が、皇紀二千六百年に際して『東洋の覚醒』として蘇ったのは、まさに亡霊の蘇りではなかったかと。

続く第五部「日本再発見」で菅原克也氏の論じた永井荷風は、この時代の移行に従って審美家へと変節を遂げた知識人の典型だが、その一九〇八年の帰国後の嘆きが、失われた江戸への郷愁だけではなく、そこにはかつて

の江戸への感受性をもはや決定的に喪失してしまった洋行帰りの自分自身への疎外感が複合していたことは、何度強調しても足りないだろう。季節の移り変わりに心変わりや物語りの推移とを託す手法は、これ以降意識的な伝統主義へと様変わりして、川端康成などに受け継がれる。荷風に続く世代の志賀直哉『暗夜行路』を通じて、Janet Walker が三〇年代に至る「日本回帰」問題に決着をつけたが、やや定型踏襲(東部を襲った記録的ハリケーンのため欠席。代読者名失念)。

第六部「アメリカの読者にとつての日本」の皮切りは、昨年オックスフォードから日本短編集を編訳して当たりをとった Ted Cossen。アカデミックを嫌う元ヒッピーの大男は、用意してきたペーパーを読むことはせず、教壇に腰掛けての巧みな談話で聴衆を惹きつける。知床半島の幼少を背景に東京への出稼ぎ離散家族を語った Allen Brown の作品 Audrey Hepburn's Neck へ Arthur Golden の大ベストセラー The Memoirs of A Geisha がその素材。ゴールドデンによると、八年間かけた執筆過程で、語りを三人称から一人称に書き直したのが成功の要因とか、といった秘話も差し挟み、また作中の小

道具「鎧屏」がその性格の隠喩ともなる主人公サユリの造形の陰に、Lafadio Hearn)と小泉八雲の「Kimitoko」のような自己犠牲の女性造形が下敷きとして隠されているのではないか、といった細部の膨らみも豊かな発表。つづくKenneth Richard氏は、長崎出身生まれのドイツ人の父と日本人の母とのあいだに生まれ、ホイットマンの秘書で劇作家、アルフレッド・ステイーグリッツの協力者、さらには映画俳優といった多面的な顔をもつSadakichi Hartmannと、グラバー邸の主だったトマス・富三郎親子を中心に、国境を跨いだ人間模様を浮き彫りにする。北米フォト・ビクトリアリズムがジャポニスムの裏打ちから成立したことは広く知られるが、その要に位置していたのが、ホイットマンについての著作も物したハルトマンその人だった。

二日目にもっとも議論を呼んだのは、続く萩原孝雄氏による挑発的な鈴木大拙論だろう。ケストラーが仏教は社会倫理とは無関係と聴いて怒り心頭に発したという逸話は(東欧亡命者としてのケストラーの位置、という最近洗ひ直しの進んでいる観点からの考察の必要はさておき)、新渡戸稲造が、宗教なく

して道徳なし、との欧米人への反発として『武士道』を執筆した経緯とか、さらにはエーリッヒ・フロムが、弓矢が平和に役立つ筈がないと当の大拙に噛み付いた、といった逸話をも思い起こさせる。萩原氏の発表からはいささか離れるが、オイゲン・ヘリゲルの『日本の弓術』が、神懸かった阿波師範の弓道を翻訳を介してことさら神秘化した経緯は、最近山田獎治氏が説得的に解析したが(『日本研究』一九九八年)、ナチズムの被害者たるフロムのこうした神経症的反応を前にした大拙は、(そうやって怒り狂っている)貴殿は何者なるや、と問い返す。烈火の如くだったフロムははつと我に返り、翌日改めて大拙に教えを請うたという。経験主義的な善悪を越えた次元で(脱)論理を構成する禅に加担する立場と、それが『啓蒙の弁証法』(ホルクハイマー／アドルノ)の負の遺産たる「悪」を見つめない逃避であるとして批判する立場とは、最近まっとうから対立している(持田季未子『希望の倫理学』は、後者の立場から本覚思想を批判した画期的な書物だろう)。近年の北米での東洋思想批判者たちが、大拙を中国侵略肯定者に仕立てるためにテキストを歪めて翻訳していることは萩原氏

の指摘の通りとしても、それゆえに大拙や西田幾多郎にこそ理がある、とするのでは議論に飛躍が生ずるだろう。西欧の啓蒙がイデオロギーとしてのナチズムを生んだならば、『日本の霊性』がイデオロギーを忌避することとでかえって何を許容し、まかり通らせることに——消極的に——加担したかも知問われる必要がある。そしてそれは、ハイデガーの場合同様、鈴木大拙個人を糾弾／免罪するか否かとはい、あくまで別次元の事柄だ。

最後の第七部は谷崎における伝統と西洋。Cody Poultonが『吉野葛』と、その下敷きのひとつ、竹田出雲の通称『葛の葉』を題材に、信田の森、道行きの場面に収斂する、子のもとを去らねばならぬ母狐の心情を見事な英訳で歌い上げる。続くMisel Jeonは、『She Who Shall Disturb Mr. Slumbers』という魅力的な題名で谷崎晩年の『瘋癲老人日記』を論じたが、その高密度ななかにも筆者の実直な性格が覗く文章の端々には、あるいは師匠たる鶴田さんへの、先回りした回向かとも窺われる情感が溢れていた。

そうした参加者の心情を素直に吐露したのが、閉会に際してのKenneth Richardのスピーチだろう。ふたりのケンの馴れ初めか

ら今日に至るまでを諧謔を込めて物語り、聴衆を笑いの渦に巻き込んだその談話は、「いつの日か辿る道とは知りながら、昨日今日とは思わざりしを」で結ばれた。あるいは間近に迫っているかも知れぬ、そして西洋医学の常識ではそう覚悟せざるを得ぬ状況を前にして、ふたりの今生の別れを惜しむ絶唱だった。最後に「I love you, Ken」と欠席の相手に呼びかけて思わず涙声になったリチャードさんの、親友への思いはいかばかりだったことだろうか。

四

その鶴田さんの最近の論文集(上述)の副題には「境界をつくるもの、境界をこわすもの」とあった。境界を壁と言ひ換えると、思ひ出される光景がある。三年前、京都の日文研に外国人客員教授として赴任するや、鶴田さんは宿舍の自室の壁の塗り替えを要求した。咄嗟に、敗戦後進駐した米軍が鎌倉のどこかの古刹の供出を要求した際に、何百年と経た木の廊下をペンキで塗り潰すようにと命じたことが脳裏を掠めた。そんな連想からも鶴田さんは四十年の滞在ですっかり北米に染

まっているな、と感じた。そもそもツルタ教授は、日本国で外国人客員教授の待遇を享受するために、日本国籍を捨てたばかりだったのだ。だが、入居者が替わるたびに壁を塗り替えることなど皆目計算に入れていなかった事務当局は大慌て。壁面塗装の責任の所在が、施設管理をする用度係にあるのか、招聘した人事課にあるのか、客員の世話をする研究交流課にあるのか、予算を掌握する会計課にあるのか、なにせ前例がないものだから皆目不明。という次第で、たかが壁の塗り替えひとつのために、四名の課長が雁首を揃えて鶴田部屋の検証にやってくる、むずかしい顔をして談合を始めたという。加えてこの新帰朝者

先生、そうした事務官の右往左往ぶりをユーモラスに誇張しては、「この国はいつたいたうなつとるのかね」などと、あたり憚らぬ大音声食堂で張り上げるものだから、背後の座席で昼食中の事務官僚たちが、一斉に首を捻って振り返り、こちらを睨む。当方は冷や汗ものである。ご本人は竜宮城とかおっしゃっていた研究センターの初日、実は毎日こんな調子で、実質上のカウンセラー・パートとしては、正直随分気苦労したのだ。官僚国家、Straight Jacket Society 日本を理解するた

めの手助けとして、宮本政次『お役所の掟』そのほかをお見せして、読後感を伺いながら飽きず談笑したのも楽しい思い出だ。

だがその鶴田さんは、結局日本という拘束衣は纏わずに、まだどこぞで次なる波乗りだか壁の塗り直しだかを始める気配である。テッド・グーセンも言うように、鶴田さんという越境する存在から、我々はまだまだいろいろなることを学び続ける巡り合わせになりそうである。

(※諸般の事情で、会議後一ヶ月以上を経ての執筆となった。当日のノートに不備も多く、加えて中年性「忘却力」の効能もあって、細部に意の尽くせない点の多々残ることを遺憾とし、併せて読者のご海容を願う。なお、鶴田欣也の闘病には涙とした気概があつて、ヘミングウェイの『老人と海』のカジキと老漁師との綱引きについての自らの分析をも髣髴とさせるものだった。)

比較文學研究

特輯 江戸の香り、明治の響き

〔巻頭言〕 比較文学比較文化と国文学……………延廣 眞治 (1)

正岡子規の肖像画……………松井 貴子 (4)

明治20年前後の小芝居……………佐藤かつら (12)

明治期の黙阿弥作品と〈西洋〉……………吉田 弥生 (24)

西洋俳句紹介前史——19世紀西洋の日本文学関連文献

における詩歌観……………前島 志保 (35)

大田南畝と江戸狂歌の先人……………小林ふみ子 (47)

明治文芸と薔薇……………中込 重明 (61)

日韓笑話に見る錯覚の滑稽……………安 宥 珍 (72)

日本古典文学のなかの韓国像……………崔 在 喆 (82)

東アジア近代小説文体の成立と二つの視線

——「浮雲」と「無情」における〈視点構造〉の分析…朴 眞 秀 (90)

若き日の島田謹二先生——書誌の側面から (1)……………小林 信行 (102)

〔書 評〕

『朝鮮の口伝神話——「バリ公主神話」集』(金香淑)……………榎本 泰子 (125)

『越境者が読んだ近代日本文学

——境界をつくるもの、こわすもの』(鶴田欣也)……………大澤 吉博 (129)

『楽人の都・上海——近代中国における西洋音楽

の受容』(榎本泰子)……………平高 典子 (133)

〔展覧会カタログ評〕

『東アジア／絵画の近代——油画の誕生とその展開』展……………西横 偉 (140)

『伝統と抽象——アジア系アメリカ人芸術家1945-1970』展……………中村 和恵 (143)

〔Le Rond-Point〕

鄭百秀氏博士論文「李光洙・金史良の日本語・朝鮮語小説

——植民地期朝鮮人作家の二言語文学の在り方」

審査結果の要旨……………大澤 吉博 (149)

鄭百秀氏博士論文審査傍聴記

——「母語中心主義」から遠く離れて……………李 建 志 (152)

金沢英之氏博士論文「近世日本の神話的世界像

——服部中庸「三大考」を中心に」審査結果の要旨……………神野志隆光 (159)

金沢英之氏博士論文公開審査傍聴記……………福田 武史 (162)

郷愁の旅路——日本と「西洋」を往還する文学的巡礼……………稲賀 繁美 (167)

延廣眞治教授著作目録……………(173)

外国語要約……………(1)

75

東大比較文學會